

する所多いものがある。第七は宗教及び神話人類地理的研究の礎石なるものとされ、神話學、古代文化について近時輩出する類書の中最も學術的價值と興味の充實したものととして推賞したい。(四六版 五五一頁、三・八〇 同文館〔藤〕)

●明治  
成辰祭神一致の御制度 第叁號 (教法新  
定の二)

山口銳之助述

本篇は明治思想史上の一大轉機を劃せる神佛分離、廢佛を取扱へるものであり、一、神祇事務促進に付大阪京都兩局の交渉、二、興福寺社僧の復飾、三、石清水八幡宮及譽田山陵祭祀の沿革、四、石清水八幡宮の廢佛を内容としてゐる。

第一節に京都に在る植松雅言と大阪に出張中の白川神祇伯、龜井茲監兩人との間に往復せられたる明治元年神祇事務促進に關する書簡(龜井文書に據る)十七通を擧げその計畫、實行等宗教政策を示し、後節の説明を助けてゐる。第二節は元年三月早々着手實行せられたる興福寺社僧の復飾問題につき、其春日神社の地位よりして、之

に勤仕するものの、佛道より勤王道即ち神道に改宗すべきが王政復古の際に於ける當然の成行と觀じ、第三節には佛敎の中に古代祭祀の形式の殘存せるものととして石清水八幡宮及譽田山陵祭祀の關係並にその沿革を論じ、第四節に我が國祭政制度に重要な地位を占め、朝廷に於かせられても御崇敬あらせられた石清水八幡宮に對する國家の教法の斷定せられたこの場合に於ける神祇局の態度と社僧神官側の内部に於ける紛争放生會復活に關する經過等を叙して、その復飾に對する社僧等の態度の興福寺のそれと異なる點を擧げてゐる。あまりに無信仰、無氣力と誤解せられ、感情的に迫害せられたる佛敎の日本のなる方面に一解釋を試みてゐる。

吾人の容易に接せられざる龜井文書を驅使して明治元年の神祇局の指導精神を説き、早くも明治元年四月延暦寺に暴行をなしたる神職の組織せる神威隊を制し訓戒せるを見るは、神佛分離が後年如何にして廢佛毀釋にいたれるかを暗示せるものと云へよう。明治維新神佛分離史料と並讀せらるべき宗教思想動搖を窺ふ好資料である。

(謄寫版菊版 一一〇頁、非賣品)(寺尾)

●薩道先生景仰錄 文學博士 新村 出著

今は亡きサー・アーネスト・サトー氏に捧げられた追想であつて、吉利支丹研究史回顧のサブタイトルを持つ。

著者の得意さる書誌學的考察の中にも先人に對する敬愛の情がひらめいて情趣豊かなものとし、自ら人を引き入れる美しさを持つ。切利支丹文化の恩人への追悼にこよなき捧げ物云ひうるであらう。(四六版 五七頁、一・五〇 ぐろりあ、そさえて發行「藤」)

●明治十五年朝鮮事變と花房公使

武田 勝藏著

此著書は明治十五年朝鮮事變に遭遇せる武田尙氏を父としたる著者が花房家より委囑せられて花房義質公使十三回忌に當り成りたるもの、従つて花房家の覺書、關係史料を縦覽し、本事變遭難者の實歴談を聴取したるが故にその遭難の狀況、交渉に至つても、詳細に平明に論述せられた。附録として遭難者の中田敬義、久水三郎氏等の回顧小録を掲ぐ。

蓋し、明治年間の諸事件が早くも忘れられんことを時

明治外交史上重要な地位を占める朝鮮關係に今この好著を得たるを悦ぶが、其執筆の性質上、花房公使を中心となし、廣き展望—江華島事件、十五年、十七年の事變の關係推移、朝鮮國內の事情等を望み得ざるは止むを得ざる所か(四六版 圖版八、本文一〇三頁、非賣品)(寺尾)

●佐藤信淵に關する基礎的研究

羽仁 五郎著

「何人も變革を期待し、しかもあらゆる變革的運動と思想とが極致の彈壓のみに一時的に屈服せしめられて居るいま、かの明治維新前期の民衆の意圖を代表した思想家の徹底的な理論と計畫と力とを日本國民の前に再び引出して來て見せることは、時宜に適して居る」といふ冒頭の一句は著者が本書に於て企圖したところ即ちその目的従つて又方法を殘るどころなく語つて居る。第一章傳記的敘述、第二章文獻批判、第三章歴史的理理解、その順序に従つて少しく内容を紹介するならば先づ信淵の生涯を叙して一面その時代と環境に及び次に彼が數多き著述